

マルコの福音書 第9章 37節

「だれでも、このような幼子たちのひとり、わたしの名のゆえに受け入れるならば、わたしを受け入れるのです。また、だれでも、わたしを受け入れるならば、わたしを受け入れるのではなく、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。」

21世紀初頭に大国による侵略戦争が勃発した。隣国に容赦なく攻め、歴史ある街々を破壊し、人々の尊厳を踏みにじり、命を剥奪し続ける。現代における国ぐるみの狂気が凍てつく大地で露わになる。人が始めた残虐行為であるにもかかわらず、人が止めることができていない。人が起こす悲惨が空の下、地上に蔓延している。どこに正気があるのか。

この戦禍のもと、攻撃を受ける民は決死で防戦する。愛する者たちを、祖国を守るためである。民は隣国に避難し、地下に退避する。攻撃はところかまわず襲っている。命を支える施設さえ例外ではない。生活を支える施設は狙い撃ちされる。どこまで正気を失えば人は気が済むのか悲惨の中悪魔の顔が、冷笑がちらつく。

戦火にあって、弱い者たちが窮地に追いやられる。水が食物が絶え、灯りが絶え、父が去り、母の嘆きを聞きながら身を潜める。こころの生き場が無く、いのちの安らぐ場が無い。それでも、潜む。それでも、歩く。主の名が崇められますように。

2022年3月11日